

「必ず希望がある」

(ルカによる福音書 21:25-31)

教会は新しい暦を迎え、降臨節、アドヴェントに入りました。アドヴェントという単語は、アドヴェンチャー（＝冒険）という英語の語源です。クリスマスは冒険の出来事です。神ご自身がお自分のそれまでの有り様を自ら壊され、冒険をしてこの世に降ってくださいました。また、クリスマスの物語に欠かせない人々、マリア、ヨセフ、羊飼いや博士たちも、冒険の先で赤ちゃんイエス様と出会います。自分が今いるところから、外に出ていく。安全なところから旅立ち、危機に出会い、そして自分自身のそれまでのあり方、殻が破られ、新しい価値観、新しい世界と出会う。それが冒険です。救い主がお生まれになった。このことを自分のこととしてまことに信じることはとても難しいことです。頑なな心が砕かれなければなりません。そのためには冒険が必要なのです。その冒険をする人々にクリスマスは訪れます。

今日の福音は終末について語っています。終末は主イエスと顔と顔とを合わせる救いの時です。終末は神様からのプレゼントです。わたしたちには世の終わりまで、希望が用意されているのです。けれども、それを信じることもまた難しいことです。わたしたちは目の前の出来事に絶望し、希望を失ってしまいます。だからこそ主イエスは「いちじくの木や他の木々を見て季節の到来を知るように、注意深くしていなさい」と言われます。わたしたちが注意深くいるなら、希望は絶対に失われないからです。なぜなら、自ら危険を犯し、この世に降って来てくださった神は、必ずわたしたちを守り、導いてくださるからです。そのことを信じて、注意深く、今このときにも注がれる神の恵みを感じて生きるなら、わたしたちはいつまでも神の希望の中を歩むことができます。今の救い、将来の救いが、主イエスのご降誕を信じる者には約束されています。今日からの四週間、わたしたちも信じる者になるための冒険に出ましょう。